

オンライン授業に思うあれこれ

大塚 朝美

2019 年度に引き続き、2020 年度の春学期も緊急事態宣言発出に伴い、大阪府下の大学は基本オンライン授業を実施するよう要請があった。昨年度のような混乱はないものの、春学期の 1 週目だけ対面授業を実施後、2 週目からオンライン授業に突入した。

授業の形態により、オンライン授業が比較的向いている科目とそうでない科目がある。講義形式の科目では、オンラインで講義を聞いているのと対面で受講しているのでは、それほど大差はないのかもしれない。一方、演習や実技を行う科目は、やはりオンラインだと色々困難な点がある。もっとも懸念することは、真っ暗な画面の向こう側でどれぐらい学生が反応してくれているのか、ということである。各家庭の Wi-Fi 環境を考慮して、授業に出席する学生は基本的にはカメラオフ、マイクミュートの状態で参加することになっている。教員によっては顔出しを原則としている授業もあるが、大抵学生は顔出しを好まない。顔を出すことに加え、プライベートな部屋の中が映ることもカメラをオンにしたくない理由の 1 つであろう。

学生がカメラをオフにしていると、画面には名前や自分が選んで設定した写真などが表示される。名前や写真が並んだ画面を相手に、「では、マイクをミュートのまま発音してみてください」と声を掛け、恐らくリピートしているだろうと想定して、ゆっくりと単語を読み上げていく。また、画面を共有しながら、「これ、見えていますか？」と尋ねてもほとんど返事はない。特に誰からも反応がない場合はおそらく問題なく見えているのだろうと考え、授業を進める。自分の説明が少し長く、一人でしゃべりすぎたかと不安になり、「今のところまでで問題なく分かった人は反応のマーク（拍手や親指を立てて **Good!** を表すようなマーク）を出してください」と声を掛けると、ぱらぱらとマークが表示され、「あ、きちんと聞いてくれているんだ」と学生の存在を確認してほっとすることもある。顔が見えないコミュニケーションとはこれほど不安で難しいものかと思ひ知らされる。今まで教室で顔を見ながら授業をすることが当たり前であったが、昨年度からのオンライン授業により、顔が見えない学生たちに対する授業の難しさを痛感している。

学生からの反応があまり期待できないオンライン授業であるが、時にはこちらからの呼びかけにマイクをオンにして積極的に答えてくれる学生がいる。3 クラスに 1 人、いるかないかといった確率であるが、そういった学生がいると色々なことがスムーズに進み、こちら側の不安も少なくなる。このような「気の利く」学生は、恐らく普段の生活においても人とのかかわりに前向きで、コミュニケーションを積極的に取ろうとしているのではないかと思う。顔が見えないながらも感謝しつつ、自分も反対の立場にある時は相手の立場を思い、前向きに接していきたいも

のだと考える。

(おおつか・ともみ 准教授／教員養成センター)
